

## 第3回教育セミナー 実績報告書

開催日時：平成27年1月24日(土) 13:30～16:45

会場：東京グリーンパレス(千代田区麴町)

### 1. 開会式



<理事長挨拶>(以下、要旨)

昨年の12月に難病を患うジャーナリストのステラ・ヤングさんが亡くなりました。彼女が“本当の障害とは何か”ということを語っています。「“障害をもつ人に比べたら、自分はずっと恵まれている。”という見方をする人たちであふれている社会こそが、障害になっている。」というメッセージです。私は、それを聞いたときに、“学校こそが障害になってはいけない”と思いました。つまり、子どもたちに向き合うということは、子どもたちを比べることではない、そういう認識がすごく大切なのではないかとこのことなのです。

今日は、個に応じる指導をテーマに道徳・キャリア・特別支援の3つの観点で語られます。多様な学びや価値観を認め合い、つなげていく方策を学びたいと思います。

### 2. 【第一部】 これからの道徳教育、多様な価値観への対応を考える！

講師：土田雄一 千葉大学教育学部特任教授

<土田教授の講演>

道徳では、認め合う集団づくりや、個人の生き方をどう考えていくのが大切であると考えます。今日は、実生活で悩んだときに問題を整理し、意思決定のために活用できるツールとして「ウェビング」という手法をご提案したいと思います。葛藤場面でいるんな考えを想定し、蜘蛛の巣状につなげて、図(授業では板書)に示して視覚化して整理します。この手法は、他の教科でも使われており、既に子どもの思考ツールの1つでもあります。道徳でも活用することで、多角的な思考を促し、いろんな考えを配慮しながら、“よりよく生きるための行動化”につなげることができるのではないのでしょうか。



これからの道徳教育についてですが、“内省化・ふり返りを大切に”ということです。道徳は自分の生き方を考える時間ですから、自分をふり返る時間を大事にしてほしいというのが1点です。もう1点は、評価の問題と関わってきます。道徳は“自分はどうかあるか”ですから、「自己評価力」を大事にする必要があるのではないかと考えます。授業で使ったワークシートとともに、授業の板書もデジカメなどで撮影してプリントアウトして児童に戻し、後でふり返り、自己評価につなげてほしい。そうすることで、今日のテーマでもある“多様な価値観”をもちながらよりよい生き方を目指していけるのだと思います。

### 3. 【第二部】児童の多様な興味・関心を子ども自身のキャリアにつなぐ！

講師：藤田晃之 筑波大学教授 実践報告：4人の先生



私の方から前半の概論の方を話させていただき、後半は、NPO法人スマイル・プラネット発行のキャリア教育情報誌『つ・な・ぐ』の授業を実践した先生方ご報告をいただきながら、小学校で日常的な教育活動を通したキャリア教育はどうあるべきかということについて、考えて参りたいと思います。

最初に皆様と共有したいのは、「草創期のキャリア教育の残像から脱する」ということです。1999(平成11)年にスタートしたキャリア教育の草創期は、小学校の先生は“まだ早すぎる、高校に行ってからやればいい”，高校(進学校)の先生は“生徒はちゃんと進学して就職しているのだから必要ない”と言い、キャリア教育を担った中学校では、“最終的に職場体験をやればいいんだ”というのがイメージでした。しかし、今日まで15年経ち、求められるものが大きく変わってきました。現行の学習指導要領でキャリア教育が大きく期待されていることはどういうことなのか確認しますと、「学習意欲の向上や学習習慣の確立」です。具体的には大きく2つです。1つは、子どもたちが自らの将来について夢やあこがれをもつこと。もう1つは“学ぶ意義を認識したりする”ことです。「君たちの学びは将来に生きていく」、そういうところが重要なのです。「君たちの学びと将来はつながっていて、そして実は大人たちも学び続けていくんだよ。」「学んで、ずっと将来まで必要になっていくんだよ。」ということ子どもたちに伝えていくことが重要なのだと思います。例えば指導内容に関する事、指導手法に関する事、そういったことを上級学年や中学校や高等学校の学びにつなぐ、あるいは様々な職業や家庭生活や社会生活につなぐ、あるいは特定の職業(子どもたちが憧れている職業など)につなぐ、その発想で教育活動をふり返ってみると意外につながります。お手元の冊子『つ・な・ぐ』の提案を授業実践したご報告をしていただきます。

【実践報告】国語：岩土・澤村先生(所沢市立若松小学校)／算数：伊藤先生(新宿区立東戸山小学校)／理科：小池先生(江東区立平久小学校)



ここでご実践発表いただいた3つの提案をコピーするのでなく、ヒントとして、それぞれの先生がお考えいただくことが大切です。“目の前のこの子たちにこのような力を付けたいから、この単元をこういうふうに応用したいんだ”という先生の思いや伝えたいメッセージがないと、逆に教科書に書いていない余計なことが降ってきたという状況になりかねないからです。そして、各教科にあるキャリア教育の大きな断片・宝物をつないでいくことが大切です。学びと学びを相互につなぐことができるのは、全教科を見通せる小学校なのかもしれません。

子どもたちは、学校の授業や生活の中で、様々な役割を果たしています。そのような場を小学校教育の中に留めることなく、皆が役割分担して社会を支えている大人にまで意識を広げてやることで、その学びが自分の将来に生きて、つながっていくことを実感できるのではないのでしょうか。



#### 4. 【第三部】読み書きの苦手は個への対応から！ ICTプリントシステム活用事例

講師：小池敏英 東京学芸大学教授

実践報告：増田純子 NPO 法人スマイル・プラネット



読み書きが苦手な子どもの定義は、「知能は正常域で、でも学力が隔たっている」ということです。最近新しく RTI 定義というものが出てきました。1 つは、LD というのは「予防的対応」で、LD 的傾向があった初期の段階で対応していこうという見方です。もう 1 つは、その段階ごとにサポートしていこう、それで対応しきれなかったものだけに LD として特別な対応をしていこうという見方です。サポートしていくにあたって、個に応じたという部分が大切になってきます。個の何に、どの部分に応じればよいのかということです。ある意味で教育はそれを知った上で、設計図を作ってあげるといことだと思ふのです。

次に、読み書き障害をもつ児童には、3つの代表的な特徴があります。長い単語を読みつまる、特殊音節が読めない、漢字が読めないということです。少なくとも平仮名が読めないと学校の勉強に対して消極的になります。学習性無力感が出てきます。これらを改善するために、スマイル・プラネットでは、文字(単語)をまとまりとして読むプリントを提案しています。それも、教科書にあわせて単語や漢字を提出することを実現しています。また、印刷物だといつも同じプリントになってしましますが、同じ読みや書きでも毎回違うプリントが Web から出力できるようになっています。明日の一斉授業の中で学習した単語が目飛び込むことはとても意味のあることです。書字でも、平仮名が読めるか読めないかというのがかなり重要なポイントになっています。平仮名と漢字の支援プリントの存在がやはり大事なポイントになると思います。

**増田先生の報告**：5人の児童に週3回の15回×2セッションをスカイプで指導。スマイル式・プレ漢字プリントのことは探し(単語検索課題)と漢字穴埋めクイズ(単語完成課題)を活用した事例です。このトレーニングをすると、対象児童の5名とも音読の時間も短くなり誤読も減って年齢相応域に入り、音読支援にたいへん効果的であるとの結果が出ました。このプリントを家庭でも使ってもらっている保護者の方にも、教科書に沿っているので、学校の学習に併せてプリントを用意しやすい。また、子どもも何度も同じ漢字を書かせるドリルではなく、珍しい課題の形式なので、遊び感覚で積極的に取り組んでいると報告を受けています。



< ↓ 会場の様子 >

